

## 12

## アイスランドの歴史③

# 世界とつながる孤島

★16世紀半ばから第二次世界大戦終結まで★

### デンマークの支配

古アイスランド語の使用を基盤とする独自の文化を育んでいたアイスランドの中世は、ルター派プロテスタンティズムの導入により終わる、とされる。わたしたちは北大西洋の孤島アイスランドの歴史は、他から隔絶されているがゆえに静かなもの、と思いかちである。しかし、実のところ、この孤島の歴史は、かならずしも外の世界と無縁でいたわけではない。近世以降、以前にも増してヨーロッパ全体が経験する歴史の変化の中に組み込まれてゆく。

アイスランドを支配地に組み込んでいたノルウェーは、1380年以降、デンマークと同君連合を形成した。このことにより、実質的にコペンハーゲンを中心とするデンマーク王権の統治体制がノルウェーに波及したのである。その波は当然のようにアイスランドにも及んだ。

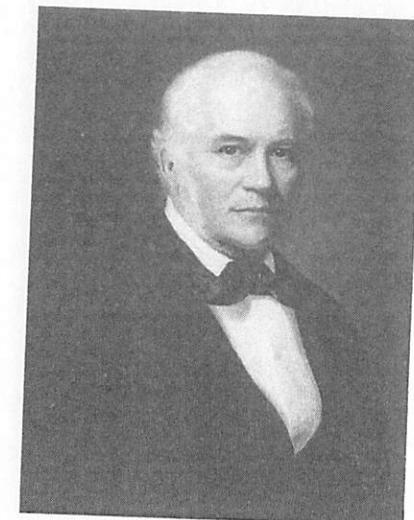
1550年、最後の司教を処刑することでデンマーク王権はアイスランドにルター派を導入した。聖書や説教でデンマーク語ではなくアイスランド語の使用が認められたことは特筆すべきであるが、アイスランドの教会もまた、デンマークのルター

派国教システムの一部に組み込まれることになった。1602年には、アイスランドの沿岸部に点在する漁村において、海産物を中心とする対外取引を行う特権が、デンマークの特定商人のみに認められた。1662年にはアイスランド側代表がデンマーク王に忠誠を示し、その後、デンマークの代理統治者である総督職を受け入れ、1703年にはアイスランド初の人口調査が実施された。さらに17世紀から18世紀にかけて、アイスランド文化の象徴とも言えるアイスランド語の写本群はコペンハーゲンに持ち帰られた。

つまりデンマーク王権は、アイスランドから、最初に信仰、次に経済、その後は統治機構、最後に文化の接收をはかつたのである。この近世と呼ばれる時代は、こうしたデンマーク支配に加えて、1627年のムスリム海賊による襲撃事件、1783年のラーキ山の大噴火、打ち続く天候不順、飢饉、疫病などによる脅威のために「暗黒の時代」と形容される。しかし、そのデンマークによるアイスランドの接收は、アイスランドの持つ経済的文化的価値の潜在能力を北欧本国、そしてヨーロッパといふ外の世界に示す契機となつたことは指摘しておいてもよい。

### 民族意識の覚醒

悲惨と言われる17、18世紀のデンマーク支配下にあつたアイスランドの流れが変わつたのは、フランス革命を経た19世紀に入つてからである。1814年、それまで実質的にデンマーク支配下にあつたノルウェーは、スウェーデンとの同君連合にうつつた。これにより北欧の政治地図は大きく変わる。まさにこの時代、ヨーロッパ全土で民族の自立をうながす動きが起つた。1830年代以降のアイ



アイスランドを代表する近代画家ソウラリン・ソウラクソンによるヨウン・シーグルソン (Jón Sigurðsson, 1811-79) である。牧師の家庭に生まれたヨウンは、デンマークから流入した啓蒙主義に基づく知識をアイスランドで身につけ、その後コペンハーゲン大学でアイスランド・ド古文化をまなんだ文献学者でもあつた。彼はコペンハーゲンを拠点とし、古文献の校訂や研究を

発表すると同時に、雑誌などを通じて自身の政治的意見を開陳した。生き生きとしたアイスランド・ヨウンが理想とするアイスランドの原型であつた。

1845年、ヨウンの理想を理論的支柱とするアイスランドは、デンマークからの指示で一旦は廃止されていたアルシングを、アイスランド議会としてレイキヤヴィークに復活させた。そして1851年、独自憲法を求める決議を行つた。デンマークの特定商人に独占されていた交易特権も、1854年には廃止された。その後、独立派と従属派に分かれて論争が交わされたものの、デンマーク本国がプロイセンに敗北し南ユラン (シュレスヴィヒ・ホルシュタイン) を割譲した後の混乱期である1854年、アイスランド議会は、デンマーク王クリスチヤン9世 (Christian IX, 在位 1863-1906) より、立法権

スランドもこの流れの中にあつた。

アイスランド・ナショナリズムの中心となつたのは、いまなお建国の父と尊敬されるヨウン・シーグルソン (Jón Sigurðsson, 1811-79) である。牧師の家庭に生まれたヨウンは、デンマークから流入した啓蒙主義に基づく知識をアイスランドで身につけ、その後コペンハーゲン大学でアイスランド・ド古文化をまなんだ文献学者でもあつた。彼はコペンハーゲンを拠点とし、古文献の校訂や研究を

とともに、初の憲法を獲得した。この年は、ノルウェーからアイスランドへ植民が行われてちょうど千年を祝す記念すべき年でもあつた。

### 移民から独立へ

初の憲法を獲得した時期のアイスランドは、植民時代に引き続き、歴史上二度目の大移動期でもある。9世紀にノルウェーやブリテンからの移民によつて生まれたアイスランドもまた、既得権益で固められたヨーロッパからチャンスのあるアメリカ大陸へという歴史の大きなうねりに乗つたのである。19世紀のアイスランドは民族の覚醒による独立機運が高まる一方で、多い時で人口の20%が北米大陸に移住したと言われる。アイスランド人は、カナダの中でもアメリカと境を接するマニトバやウイニペグに集団で定住し、現地ではアイスランド語の新聞なども流通するほどのコミュニティを形成した。19世紀後半以降、特権の廃止でデンマークからの経済的なくびきを脱したアイスランドでは、畜産物や魚類の輸出によつて富を蓄えたブルジョワ層が生まれ、レイキヤヴィークのような都市が成長した。散居定住型社会であつたアイスランドも、外部との接触の中で資本の蓄積と都市化という近代化が進んだのである。20世紀に入り、アイスランドの脱デンマーク化は進展した。1904年2月1日、コペンハーゲン大学で学び詩人としても名を成していいたアイスランド人、ハンネス・ハフステイン (Hannes Hafstein, 1861-1922) が初代アイスランド首相としてデンマーク王より任命された。そして1918年、アイスランドはデンマーク王権との間に協定を結び、主権を獲得した。ここにデンマークと同じ国王をいただく同君連合のアイスランド王国が成立した。1920年には、憲法の大幅改正を行い、

独自の最高裁判所も創設された。

第二次世界大戦下の1940年4月、デンマークがドイツに占領されるやいなや、アイスランドは連合国のイギリスに占領された。翌41年、連合国側の協定により、アメリカがアイスランドを防衛することになり、アメリカ軍の駐留が始まった。両国は従来海路しかなかつたアイスランドに空港を建設することで、北大西洋の孤島を空のネットワークに組み込んだ。大西洋と北海の間に浮かぶアイスランドは地政学上の重要な拠点であると認識されたのである。

占領下のデンマークに連合するだけの力がないと判断したアイスランド議会は、1944年5月の国民投票による判断を経て、1918年の協定を破棄した。そして同年6月17日、民族意識覚醒の父ヨウンの誕生日であるまさに記念すべき日に、アイスランドは共和国として正式に独立を宣言したのである。

(小澤 実)

▼参照／第26章

# 13

## アイスランドの都市

★レイキヤヴィークとアークレイリ★

レイキヤヴィーク——始まりの場所から首都へ

レイキヤヴィークは北緯64度に位置し、世界最北の首都である。とはいっても、暖流の影響で比較的暖かい海岸沿いにあるため、真冬でも最低気温はせいぜいマイナス10度までしか下がらず、「氷の国」という名から連想するほど寒くはない。ただし、海沿いはとくに風の影響を受けやすく、強風や吹雪の日には体感気温が一気に下がる。冬場には、学校や仕事帰りにふと空を見上げるとオーロラが見えることもある。この街の住民にとっては珍しいことではないが、外国から訪れる観光客にはそれも大きな魅力である。

アイスランドには、都市部が非常に少ない。内陸部は氷河や荒野が占めているため、人口のほとんどは海岸線に集中しているが、なかでも首都レイキヤヴィークとその周辺の6つの自治体を含む首都圏(Greater Reykjavík)にアイスランドの全人口(2015年7月現在、33万人強)の6割をこえる約21万人が住んでいる(レイキヤヴィークのみで約12万人)。そのため、アイスランド語の「borgin = the city」という普通名詞が、レイキヤヴィークを指すことになるのである。とはいっても、レイキヤヴィークは口